

10 月 16 日 年間第 29 主日

あきらめるな

ルカによる福音書 18 章 1～8 節

¹ イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された。² 「ある町に、神を恐れず人を人とも思わない裁判官がいた。³ ところが、その町に一人のやもめがいて、裁判官のところに来ては、『相手を裁いて、わたしを守ってください』と書いていた。⁴ 裁判官は、しばらくの間は取り合おうとしなかった。しかし、その後考えた。『自分は神など畏れないし、人を人とも思わない。⁵ しかし、あのやもめは、うるさくてかなわないから、彼女のために裁判をしてやろう。さもないと、ひっきりなしにやって来て、わたしをさんざんな目に遭わずにちがいない。』⁶ それから、主は言われた。「この不正な裁判官の言いぐさを聞きなさい。⁷ まして神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでもほうっておかれることがあるか。⁸ 言うておくと、神は速やかに裁いてくださる。しかし、人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか。」

他の朗読：出エジプト 17：8～13 詩編 121 編 II テモテ 3：14～4：2

Lectio …読む

イエスは複雑な考えをはっきりとわかるようにする達人です。ここでは、忍耐強くあることの大切さを説明するために、簡単な話を用いています。そして、それを祈りに結びつけています。

裁判官に懇願しているやもめは、正義を求めています。彼女は単に、相手が法を守るように、裁判官が彼女の権利を確認することを望んでいます。しかし、何らかの理由で、裁判官はその事件を審議するのを拒み続けています。

最終的に、その裁判官が折れます。それがやるべきことだからではなく、このやもめが決して諦めないということが分かったからです。彼は彼女がひっきりなしにやってくることに正面から向かい合うことができません。それで譲歩し、彼女のためになるように裁判します。

イエスは、その後墮落した裁判官の行動を神と対比させます。その違いは余りにも大きく、黒と白を比較するようなものです。イエスは、神はご自分の民のためになるように判断し、しかも素早くやってくれるであろうことを私たちに確信させるのです。なぜでしょうか。それは、神は善で正義であるからです。神は確実に応えてくださるので、私たちは神に助けを求めることを恐れる必要はないのです。(8 節前半)

8 節の後半部分でイエスはもう一つの質問をします。「しかし、人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか」と。これは祈りにおける忍耐強さと何の関係があるのでしょうか。

おそらくイエスは、忍耐強い祈りは信仰によって支えられる、と言っているのではないのでしょうか。もしあなたが、神があなたを愛していることを信じているなら、たとえ神が直ちに応えてくれなくてもあなたは祈るのをやめないでしょう。

さらに重要なことは、イエスの再臨はある人々が期待しているよりも遅くなるかもしれないとイエスがほのめかしていることです。ですから、祈る忠実なキリスト者にとっては特に、練達と忍耐とはつながりがあるのです。

粘り強い祈りは誠実な望みを励まします。それがイエスがたとえを始めた箇所です。誰もイエスの再臨の時を知らないということにおいて、それは祈りの中で注意深くあり続けるというルカ 21 章 34～36 節につながっています。そして、それは今日私たちにとって真実であるのと同様に、弟子たちにとっても真実だったのです。

Meditatio …黙想する

あなたの祈りに対して、神の答えを長い間待たなければならなかった時のことを考えてみましょう。粘り強く、あきらめないように、何があなたを励ましてくれましたか。

なぜ神は、必ずしもすぐに私たちの祈りに応えてくれなかったり、時には「否」と言ったりするのだと思いますか。

この箇所と、祈りの中の粘り強さについて教えてくれているマタイ 7 章 7～11 節との類似点をよく考えてみましょう。

「このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして、あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない。」

Oratio …祈る

詩編 121 編 2 節は、「わたしの助けは来る／天地を造られた主のもとから」ということを私たちに思い出させてくれます。

今日の祈りの中で再び、あなたが気にかかることを神に持ちかけてみたらどうでしょうか。神の応えを待つ間、あきらめることがないように神の助けを願いましょう。全宇宙の力強い創造主は、私たちを決して見捨てることがないということに感謝をささげましょう。

Contemplatio …観想する

Ⅱテモテ 3 章 14 節～4 章 2 節の中の、特に下記の 16、17 節におけるパウロの言葉をよく考えてみましょう。これらはあなたにとって何を意味しているのでしょうか。

「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です。こうして、神に仕える人は、どのような善い業をも行うことができるように、十分に整えられるのです。」